

終戦記念日

1945年8月、太平洋戦争も既に敗色濃厚となり、国民は塗炭の苦しみを続け、日々多くの屍を野に晒しているのに、時のリーダー達は戦争終結という決断ができずにいました。8月14日に開かれた最後の御前会議においても意見がまとまらず、ついに、昭和天皇のご聖断によってポツダム宣言受諾が決定されたといわれています。翌15日正午、昭和天皇が録音された「大東亜戦争終結の詔書（終戦の詔書）」がラジオを通じて放送され、ポツダム宣言の受諾と軍の降伏が国民に知らされ、国民は、その日の夜から空襲を心配しなくて済むようになりました。広島に原爆が落とされてから僅かに1週間余りのことです。リーダー達の、不決断、戦略性のなさによって、余りにも多くの命が失われてしまいました。しかし、この事について責任をとったリーダーの存在を、私は知りません。

我が国は、この日を以て「戦没者を追悼し平和を祈念する日（終戦記念日）」とし、今年で66回目の記念日を迎えました。

私は、終戦の翌年に生まれましたので、戦後日本と共に生きて来たといえます。戦後日本は、アメリカと同盟することによって、平和と経済的な発展を享受して来ました。バブルが弾けてしまった以降の日本は、景気低迷が続き、会社の倒産や失業者も増えていますので、若い方達、取り分け平成に生まれた世代にとって、私が生きてきた昭和の時代は既に遠い存在なのかも知れません。

ただ、地球上では、戦後も今日に至るまで、様々な国や地域で、今なお途切れることなく戦闘がおこなわれています。私は、自宅を破壊され、故郷を追われて流浪する難民の姿を見るにつけ、国民の幸せは、戦争のない平和な国にしか訪れないのだと実感しています。

毎年8月15日は、戦争によって亡くなられた多くの方々を追悼すると共に、改めて、平和な国づくりを決意する日でもなければなりません。何故なら、平和は、祈るだけでは手にすることができないからです。

日本は、何故アメリカと無謀な戦争をしたのでしょうか。国民は、アメリカと戦争を

して勝てると思っていたのでしょうか？日米開戦まで米国と交渉していた野村吉三郎駐米大使は、戦後「日本はアメリカと戦っても勝てないだろうと思っていました。私ばかりでなく海軍の幹部の大半が同じ感触を持ち、私の日米交渉に期待を寄せていました。」と語ったといわれています（NHK取材班「日米開戦勝算なし」）。勝てないと思いながら、甘い期待と杜撰な計画、日本軍は強いという根拠のない思い込み、そして何より、命がけで戦争を回避しようとしないうリーダー達の不甲斐なさによって、決断なき戦争に突入していったのではないかと、私は思っています。

二大政党が政争を繰り返し、短命内閣が続いてリーダーシップが発揮できないという、まるで昭和20～30年代の姿を彷彿とさせるような国の姿から脱却して国民からの政治不信を解消しない限り、日本という国が、国内外に対して、平和へのイニシアチブを取ることなど考えられるはずもありません。（塾頭 吉田 洋一）